変わる日本の「暮らし」と「まち」 no.58

1年前の提案が実現した中学生と災害公営住宅の交流会

岩手県大船渡市・所通東（ところがよいひがし）地区災害公営住宅（2015年◆平成27年）

阿部民子
Abe Tamiko
illustration：Shigeyuki Sakata

「うわー、いい匂い！」「生地がプツプツしてきたら、ひっくり返してね」。甘い香りが漂う暖かな部屋に、中学生の元気な声と、それに応える女性の声がにぎやかに響き渡る――2016年11月28日、岩手県大船渡市所通東アパート（災害公営住宅）で、アパート入居者と、隣に建つ大船渡市越喜来（おきらい）中学校の1、2年生34名の交流会が行われた。集会所では、ベテラン主婦の入居者が、中学生に地元の郷土菓子「かまもち」と「なべやき」の作り方を伝授するなごやかな光景が繰り広げられた。

「かまもち」とは、小麦粉を練った生地に胡桃味噌を包んでゆでたもの、「なべやき」は、黒砂糖味の和風ホットケーキのようなお菓子で、ともに古くからこの地方で農作業の合間などによく食べられてきたという。

エプロンをかけて調理に参加していた花崎踊（おどり）さん（中2）は、「なべやきはおうちでもよく作るけど、今回みたいにフルーツを入れたことがなかったので、ぜひ次は挑戦してみたい。分量や作り方をすごく丁寧に教えてくれたので、とてもやりやすかったです」と笑顔で答えてくれた。

入居者の村上仁美さんも「みんな、素直ですごくかわいいね。話をしてみると、知り合いのお孫さんだったりして、これを機会に顔見知りになれたのもうれしいです」と楽しそうに話す。

災害公営住宅で中学生と交流

この交流会のきっかけは、1年前の2015年11月に遡る。大船渡市中心部から車で北東に20分ほどにある越喜来地区は、被災家屋の8割が全壊するなど、東日本大震災で大きな被害を受けた。大船渡市では、市内25地区801戸の災害公営住宅が整備され、UR都市機構は、大船渡市との協定に基づき、そのうちの14地区227戸の災害公営住宅の整備を進め、同年7月に全ての住宅を完成させた。越喜来地区の所通東アパートもその1つだ。

地元の人々が待ちかねた災害公営住宅は、地区初の鉄筋コンクリート集合住宅。それだけに、隣接する越喜来中学校の子供たちは、日々建物が建つ様子を興味津々に見守っていた。

それを知ったUR都市機構は、中学生たちのために社会科見学を提案。住宅が完成した2015年11月に越喜来中学校の1年生18名を招待して見学会が行われた。当日は、最新の防災設備や高齢者向けの住宅設備などを紹介するほか、UR職員らが現在の仕事に携わるようになった経緯や建設の経緯などを説明。キャリア教育の視点も盛り込んだプログラムになった。

見学会プロジェクトのリーダーを務めたUR都市機構岩手震災復興支援本部住宅整備部住宅計画チームの松本京子は振り返る。

「URは、いままでもコミュニティー作りなどソフト面での復興支援にも力を入れてきました。見学会では災害公営住宅を知ってもらうと同時に、今後入居者の方とどんな交流をしたいか、中学生にアイデアを募ったんです。今回の交流会は、そのアイデアを実現したものなんです」

中学生からは「お年寄りから昔の話が聞きたい」「隠し芸大会や運動会、カラオケ大会をしたい」など楽しいアイデアが続出。そのなかの「伝統的なお菓子を一緒に作って、お茶会がしたい」というアイデアが採用され、1年後の2016年に所通東アパート、越喜来中学校、大船渡市が主催、UR都市機構がサポートをする形で、今回の交流会が行われたのだ。

入居者、中学生、UR職員が一つの輪となった。

1年前と今回のイベントを引率した大和公恵先生は語る。

「復興教育の必要性が叫ばれていますが、子供たちにとっては海岸線の工事などは当たり前の風景になっているし、災害公営住宅が隣に建っていても、住んでいる方と触れ合うこともなかなかありません。それだけに、交流会は自分たちの地区の復興や被災者の方々の暮らしを考えるすごくいい機会になりました」

交流の礎となるベンチを再生

お菓子作りと並行して、越喜来中学校の体育館では、中学生と所通東アパート入居者の別チームが、仮設住宅で使われていたベンチの修理を行っていた。

大船渡市では、昨年災害公営住宅の整備全てが完了した。そのため、撤去が始まった仮設住宅の老朽化したベンチを集めて直し、再利用しようというのだ。

作業に参加していた岩手大学の船戸義和特任研究員は語る。

「このベンチは、私がNPOにいたときに青山学院大学のボランティア、仮設の方々と一緒に作ったものです。それを今回、地域の子供たちと一緒に直して使おうというのは、すごく意味があることで、うれしいですね」

熱心に黄色のペンキを塗っていた岡澤風華（ふうか）さん（中2）は「板の外し方を教えてもらったりして、今日はすごく楽しかったです。今度はお手玉とか昔の遊びも教えてもらいたい」と話してくれた。

作業が終わると、生徒と入居者が車座になって、集会所で作った「なべやき」と「かまもち」でお茶っこ。作りたてのお菓子に、会話も弾む。最後に、入居者を代表して坂本喜一郎自治会長が「かわいい〝孫たち〟と一緒に作業して、美味しいお菓子を食べさせてもらって、生涯の思い出になりました。これからも、お茶っこ飲んだり、お話したり、いつでも遊びに来てください」とあいさつ。体育館に温かな拍手が響いた。

大船渡市都市整備部住宅公園課住宅管理係の大津泉係長は、「越喜来にはこれまで大きな集合住宅がなかったので、地域に溶け込めるように何らかの取り組みが必要だと思っていました。昨年URさんから提案をいただいたのをきっかけに、今回も盛り上がってすごくよかったです。イベントを通して、子供たちに地域の一員であることを認識してもらいたいし、入居者の方と顔見知りになることで、町で会っても声をかけたりと、見守りの目ができる意義も大きいですね」と話す。

作業に参加したUR都市機構住宅計画チームの中村久主幹は言葉を継ぐ。

「今回はアパートの方だけでなく、地域の方や大船渡市応急仮設住宅支援協議会の方もお手伝いに来てくださって、いい会になりました。今日の交流会がきっかけになって、今後もさらに地域の輪が広がっていくといいですね」

新しい命を吹き込まれた12脚のベンチは、所通東アパートのほか越喜来中学校にも置かれる予定だという。このベンチが運動会などでは地域の人の特等席となり、子供たちと地元の輪をつなぐ存在となってくれることだろう。

街に、ルネッサンス
UR UR都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社